



昔語り



川崎ゆきお

「さて、どこまで話したかな？」

「昨日のお話の続きで結構ですから、お願いします」

「ああ、だから、どこまで話したかな？」

「村に地蔵が来たところまでです」

沢田は、レコーダーをオンにした。既に一週間分の記録が入っていた。

「それは、わしが産まれる遠い昔の話だからな。わしも聞いただけの話だよ」

「結構です」

「地蔵送りでな。隣の下山田から地蔵が来たんじゃよ」

「続けてください」

「その地蔵は神輿に乗っておってな」

「地蔵は仏でしょ。地蔵菩薩。神輿は神様では？」

大場老人はむっとした。

「昔はその区別が曖昧でな。まあ、輿のようなものに乗せて担いで来たんじゃよ。先頭は下山田の名主さんでな。羽織り袴でな...で、その後ろを大勢の村人が揃いの法被を着ての...」

沢田は黙って聞いている。

「地蔵送りは賑やかだったらしい。祭り騒ぎじゃ。届けてくれた村人に、御馳走をふるまっの」

「大場さんはそれをどなたからお聞きになりました？」

「おふくろから子供のころに聞いた」

「江戸時代の話だと思うのですが、それが語り継がれているわけですね」

「そうなるかな」

「で、地蔵は？」

「地蔵は村で一泊し、隣の北山田へ送ったとか。わしが聞いたのは、そこまでじゃ。こんな話が何ぞ役に立つのかな？」

「昔語り本として編集し、郷土の歴史として出版します」

「山から天狗が降りて来た話もか？」

「一週間前の、あのお話も、非常によかったですよ」

「ギャラはいつ入る？」

「はあ？」

「とぼけないで」

「ギャラと言いますと」

「本になるんだろ？」

「そうですが、予算が」

「それは、そっちの勝手な理屈じゃ」

沢田はレコーダーをオフにした」

「わしの話は無料か？ わしの働きはボランティアか？」

「はい」

大場老人はレコーダーを庭石にぶちつけた。

了